

『グローバル天理』第9号（通巻33号）掲載論文要旨

井上昭夫 「巻頭言 農地を潤すチェックダム—水源確保インド報告」

天理大学地域文化センターでは「国際参加」インド・プロジェクトを立ち上げ、昨年の夏、インドのグジャラート州の農村において、学生と現地のNGOの協働で20mほどのチェックダム(堰)を完成した。先月その現場を調査するために訪れたが、周辺の土地は見事に緑の畑となり農作物がゆたかに育っていた。

急激な人口増加による食糧需要が増え、世界ではさらに貧困層が拡大、水不足も深刻化していくであろう。そこで大地を潤すには天から授けられる膨大な雨水を、より効率的に活用することが大切だ。来年度のインド・プロジェクトの継続・拡大が期待される。

荒川善廣 「「元の理」の探究（18）—神と世界〔1〕」

世界は神であるということと、世界は神の身体であるということは、同じではない。前者は典型的な汎神論(panteism)である。汎神論の問題点は、神の世界からの超越性が成り立たず、また、創造や啓示や救済を行う神の人格的主体性が認められないことである。他方、伝統的な有神論(theism)では、神の超越的な絶対者としての側面が強調されすぎて、世界がなぜ存在しているのかについて、納得のいく説明を与えることができない。これらの問題を解決するためには、神に精神性(mentality)と身体性(physicality)の両面を認める必要がある。

宮田元 「宗教・スポーツ・教育（13）—宗教とスポーツ〔11〕」

産業化の進展とともに、労働の形態にも機械化による変化が見られるようになり、働くこと自体の意味にも世俗化の影響が及んでくる。雇用者たちは労働者が増大する余暇の活用について、スポーツとレクリエーションの計画を積極的に取り入れ、発展させた。これが企業とスポーツを結びつけ、スポーツとしての労働という思想が助長されてくる。一方、既成宗教も身体的な健康と道徳性は協力して歩むという考えのもと、スポーツやレクリエーションと和解し、道徳的に芳しくない商業的なレクリエーションと競って、レクリエーション計画に着手した。今日スポーツは職業化され、ビジネス化されている。合理的な労働のエートスは、道徳的禁欲のエートスと同じように、スポーツのもつ遊びの特性を窒息させているように思われる。

末延岑生 「ことばと教育（18）—ことばの元を探る〔18〕」

人は間接経験さえをも、記憶実質として脳に取り入れる力をもつ。つまり、記憶の曖昧さはこのような偉大な力を秘めていると考える。だから、人間の言語においても、10億年にわたる八千八度の生まれ変わりの中で、人間の祖先が直接体験してきた事柄を、脳はバーチャルな直接体験として、単純な伝達手段からはじまって、ことばという形にして記憶にとどめ、それらは次々と子孫の遺伝子に焼きつけられ、その後、知恵の仕込み、文字の仕込みを通じて、言語は今のような形に仕込まれて行ったのではないかと筆者は想像する。

人間のことばは、人間が直接に経験しない事態、想像さえできないあらゆる新奇な構文までも、すべての人間にとって、まるで既知のようにことばとして受け入れることができるのがその証拠である。これは比較発生学における E.Haeckel の「反復説」が自明の現象となっているのと同じように、言語の発生は、八千八度の系統伝達・言語の繰り返し、反復から起こったものであると断言してもいいかもしれない。もしそうであるとすれば、幼児の言語獲得の場合も、ちょうどそれを紐解くかのように、10億年の蓄積を少しずつリカバリー作業をしているのかもしれない。子供がこうして少しずつ復元し、語彙が多くなるのとは逆に、年をとるにつれて最近に覚えたものから順に忘れてゆき、最後には幼児に覚えたことばが残るという事実はヤコブソンの失語症の研究の中でよく知られている。

以上のように、脳は、移ろいやすい人の思考や心のように、頭蓋骨の中に静かに浮かんでいる。脳の柔軟性をそのまま形にあらわしているといいたいだろう。私たち生物も、このどろっとした神秘の脳も、原始地球の、どろっとした、混沌とした泥海の「チキンスープ」から生まれたものである。ということは、表面的には泥海スープといっても、実際は混沌としたものではなく、しっかりと計画され、システム化された神秘のスープであったことには間違いがない。なぜなら生物はすべてこのどろっとしたスープのなかから生まれたからである。

堀内みどり 「天理異文化伝道(31) 天理教のコンゴ伝道 [30] —ノソング会長就任(1971-1989) [4]」

ノソング会長になってからは、本部は出張所を通して、コンゴの信者や布教伝道のため、定期的にコンゴへの巡教者を派遣している。パリ出張所との人の往来があり、出張所からもパリへ行くようになった。1985年、コンゴブラザビル教会にも世話人を置くことになり、9月に高井が任命された。世話人は本部から任命され、それぞれの教会がかかえる個別の問題に対処する任務や教会と本部とを結ぶ役割などを担っている。

小滝 透「天理比較神秘論への試み(33) 宗教と世俗 [5]」

今回は、イスラーム原理主義の内面を分析し、その心象風景を描いてみた。彼らは、表向きのスローガンとはまた別の隠された怨念(西欧世界との衝突・対立の中で生まれた史的なトラウマ)を持っている。それが、近現代的諸問題とも相まって激しい反西欧感情を形成しているのである。昨年9月の同時多発テロはまさにその爆発とも言うべき事件であったと思われる。

小林正佳 「芸術・癒し・宗教(32) —かけ声をかける」

録音された音楽を相手に踊る踊り手は、その場その場の出来事とは無縁に流れる固定した脈絡の中に自分を当てはめてゆかなければならない。結果として全体が揃っているように見えても、しかしこれは、同じような作業に従う人々がたまたま隣り合わせているようなものに過ぎない。

確かに手軽だという点で、今やテープやCDの音楽で踊ることに人は何の疑問も抱かない。しかし、踊りを実際に組立ててゆく上で、さらには、踊る体験自身の中身という面で、このことはほとんど致命的といってよい違いをもたらしてしまう。その場その場で実現する踊りの醍醐味が、ここにはない。当然、民俗舞踊を通して実現するはずのからだと心の在りようが、ここでは生まれてこない。

録音された音楽でないとしたら、何があるだろう。どんな働きかけが可能だろう。たとえば、ハイ!でもいい、ソレッ!でもいい、ナマのかけ声を掛けてほしい。生きた人間の働きかけであればこそ、声を発する人間の呼吸が踊り手の中にうまく飛び込んで、それだけで相手を動かす力になるかもしれない。少なくとも、そうした事態を生み出してゆぐために踊り手の呼吸を探り、双方の呼吸を同調させてゆく試行錯誤の回路になる。

塩澤千秋 「脳死・臓器移植—カナダ通信(24) 臓器移植研究と政治規制」

ヒト胚医学研究使用について多くの国で法的規制を加え始めている。その決定の裏側には様々な団体がその思惑によって政府に働きかけている。その均衡のうえでそれぞれの国は様々な法的規制を行っている。命そのもの、また人間の将来のみを考えての規制ではない。宗教的な議論の場合にも科学を宗教と対立するものとして捉えても説得力はないようである。教義から科学的事実を捉えて同じ基礎に立って始めてかみ合う議論ができ、初めて納得されるのではないだろうか。

特別掲載: 第2回天理スポーツ・ギャラリー展関連シンポジウム2002(5)
パネルディスカッション「天理ラグビーの真髓と人材育成」 [3]

前号に引き続き、シンポジウム「天理ラグビーの真髄と人材育成」の第2部パネルディスカッションの内容を掲載する。なお、本パネル討論は榎引英吉(Kushibiki Eikichi)氏(やまのべラグビー教室指導者)、田中伸典(Tanaka Nobuteru)氏(天理教葛原分教会長)、ハツ橋修身(Yatsuhashi Osami)氏(神戸製鋼ラグビー部員)、藤本雅夫(Fujimoto Masao)氏(天理教谷村町分教会長)、後藤洋一(Gotou Youichi)氏(天理教愛布教所長)、川村幸治(Kawamura Kouji)氏(日本ラグビーフットボール協会理事)の6名をパネリストに、後藤典郎(Gotou Norio)氏(天理高等学校一部ラグビー部長)を司会に進められたものである。本稿では、パネルディスカッションにおける後半の内容を紹介する。ここでは、天理教の布教師を務める後藤洋一(Gotou Youichi)氏が「ラグビーを通しての布教」をテーマに、自身の体験エピソードを基にして語られた。